
泡沫

久住 なつき

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泡沫

【Nコード】

N2953C

【作者名】

久住 なつき

【あらすじ】

「まさか、こんなことになるとは思わなかった」彼はそう言い残して消えた。もう一度彼に会いたい。自分嫌いだった真子は、自分を好きになれた。しかし隣に翔はもう居ない。

初

「まさか、こんなことになるとは思わなかった」

そう言い残して、彼は消えた。

私だって「まさか」こうなるとは全く思っていなかった。
もう一度彼に会いたい。

「太陽が降り注ぐ庭に、赤い花が咲く」
「赤い花が咲く庭に、太陽が降り注ぐ」

国語の時間。単語に分かれた文字を並び替える問題。
上は私の解答で、下が彼の解答。どちらも正解だ。

「翔の答え、何か詩人っぽい」

クラスの大半の子は私と同じ答えだ。

先生曰く、下の解答の人はロマンチストらしい。

「翔って、ロマンチストなんだー。へーえ」

「あ？何だよ凡人」

「・・・いーの！普通が一番なの」

「つまらねえ奴だな」と言って翔は笑った。

翔は中三になって初めて同じクラスになった。翔と私は普通の友達とはちよつと違う。

付き合っている訳ではない。

翔が私を好きなのだ。

告白されてはいないけど。

友達からも教えてもらったし、一緒にいるとたまにそれを感じる。

翔も私が気持ちに気づいていることを知っている。

ただ、私達は年齢の割りにずるいから、お互い鈍いふりをしてやり過ごしている。

私には彼氏も好きな人もいないし、モテたことも何も無い。

翔が結構かつこ良いし、人気もあるし彼氏としてはすごく良いと思う。

でももし翔が告白してきたら、私は彼を振るだろう。

「翔ってさ、運動得意で、バカっぽいのに、以外と勉強も出来るよね」

「勉強出来た方が良くいじゃん。お前は運動駄目で成績もあほだよな」

「なー、もう。けんかなら買います」

「負けるくせに。てか何か得意なことねえの？」

「ないよ、何も」

私は中身の無い、つまらない人間だから。

運動も出来ないし頭も良くない。それを克服する気持ちも続かない。面白くもないし、優しくもない。容姿だって恵まれている訳でもない。

「お前、友達多いじゃん。そついうところは、良いと思つぜ」

友達だって、一見たくさん居るように見えるけどそれは頑張っているだけ。

笑いなんて取れないし、テンションで精一杯合わせてる。実際沈黙も多いし、同じ言葉をくり返すことなんて毎度だ。

もし翔が私の見せ掛けの人望に惹かれたのなら終わりのもすぐ見える。

これ以上深く関わりあいたくない。素敵な自分という印象のままにしておきたい。

「皆優しいし、楽しいからね。でもそれ以外良いところないよ私」
「まああんまり取り得無いのは知ってる」
「・・・うざー」

翔は笑う。

むかつくだけだった彼の毒舌が、最近好きになってきた。私だって恋をしたいという気持ちはある。

だけど、もっとネガティブな弱い私を知って、好きになってくれる人じゃなきゃ駄目だ。

翔には、まあまあイケてる自分を見てもらえれば良い。

一、ありふれたこと 『学校と?』

中学生くらいの女の子は、恋の話が好きだ。

自分の話よりは、どちらかというと人の色恋沙汰を話したがる。

放課後、仲の良い子、十人くらいと教室で残って話していた。

特有の雰囲気が出来て、好きな人はいるのか、それは誰かと、一人ひとり聞かれていく。

教えて協力してもらえたら、なんて全く思っただけでもしこれで黙って、同じ名前を出されて協力なんてさせられたたまらない。

結構騒がれている人気な人だし。

別に誰にバレても構わなかったので、正直に言った。

「あーでも1組の元木翔って、好きな人いるらしいよ」

派手に髪を巻いている牧瀬が言った。

「・・・そうなの?」

「結構有名じゃない?」

周りの女子も「うん。ねー」と相槌を打つ。

クラスも違うから、知らなかった。でも知らないのは私ともう二人くらいのようだ。

シヨックだけど、ある程度は覚悟していた。

普通に好きな人くらいいるだろうから。

「ね、元木が好きな人って誰?」

「噂だと1組の杉澤真子って子」

「杉澤さん？」

皆が一斉に喋り出す。

「あー、何かいつも囲まれてる子でしょ。あの集団超ってるさい」

「杉澤さんがなに、りーだーなの？」

「そういう訳ではないよね。滝川と矢口あたりがうざい」

「真子はすごい良い子だよ」

「てか結構可愛いよね」

「あの中だったら愛ちゃんと恵さんが可愛い。まじもえ」

「てか杉澤さん、この前駅で見たの。何かめっちゃ雰囲気違った」

「学校と？」

「そう！何か負のオーラがすごくてか暗かった」

「あー何かぼいわ。中二んときも何か無理があったもん」

「そーなの？普通に明るい子だと思ってた」

女の子の話はずっと続いていく。

私はケータイを弄る。

（一組なら・・枝里子に協力してもらって）

杉澤さん、翔の好きな人がどんな人なのか見てみたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2953c/>

泡沫

2010年10月16日19時20分発行